新刊紹介

「雪と建築」

日本建築学会著
技報堂出版 A5・132 頁/2100 円
発行年月日：2010 年 8 月
ISBN：978-4-7655-2544-2

雪と建築とは，密接な関係にある．それは，建築が人間の生活の場であるがゆえであろう．雪国にとって雪は生活の一部であり，特に冬の生活においては，そのほとんどを雪と連れ添うことになっている．したがって，三段論法的にも，人間の生活と密接な関係にある建築は，雪と関係深いといえよう．

雪と建築に関しては，古くは，日本雪氷協会時代の雪氷 1 巻 4 號に平田徳太郎先生が論じた「屋根の雪卸し是非」があり，日本雪氷協會誌論文集第 1 巻（昭和 15 年）にも黒田正夫先生，木下是雄先生による「風洞による人工吹雪の實驗報告」で防雪塀周辺の吹きだまりについて研究されている．また，日本雪氷協会編集「最近雪氷學の概觀 雪氷十年」東海書房刊（昭和 24 年 4 月）にも木村幸一郎先生，吉坂隆正先生による「第 11 章　建築」があり，その重要度が伺える．なお，木村幸一郎先生は，早稲田建築學報第十五號（昭和 13 年）に論文報告として「積雪地方農家に於ける冬季の採光及室内溫度狀況」も論じている．

もちろんのこと，日本各地で降る雪の性質や量は，気温や地理的要因により異なり，建築物で起こる雪の問題を複雑にしている．特に近年は，都市の過密化，建築物の高層化あるいは地方の過疎・高齢化に伴い，建築に関わる雪問題も変化してきている．そこで，現代の雪と建築に関わる基礎知識を整理したものが本書である．

本書は 5 章から成り立っている．

1 章では，近年の豪雪被害・災害，並びに豪雪による建築物の倒壊被害や現代における建築の雪問題が記載されている．2 章では，建築を設計する際に関わる雪の性質や雪対策など，建築設計者にとって知っておくべき雪の基本的な内容が記載されている．3 章では，積雪地において建築を設計していく上での重要な問題点が，非積雪地での設計とどのように異なってくるかを中心に記載されている．4 章では，雪と建築との関わりで最も重要な屋根の設計について，形状の問題や付属設備ならびに屋根材料まで，雪国の建築を設計する上でのディテールが記載されている．5 章では，雪対策の考え方や，雪を知らない設計者が雪のデータをどのように判断していくか，わかりやすく述べられている．また，雪と建築にまつわるこれまでの数々の実験について，簡単にではあるが記載されている．

以上のように，本書は，どちらかといえば，雪を知らない建築設計者が，雪国において建築を設計する際に，どのような点を検討すべきなのかについて，雪と建築に関して必要とされる基本的知識をまとめた書である．

ところで，本書の各章の最後にあるコラムがおもしろい．各コラムの題は，以下のようになっている．

・地球温暖化と雪の問題
・氷コンクリート（小氷塊コンクリート）
・雪の吸音効果
・雪煙（ゆきけむり・せつえん）
・雪質と雪祭り・雪遊び

このように専門書として，ただ単なる専門（本書の場合は「雪と建築」）の解説だけでなく，読み物を付随させることによって，より一層，非積雪地の読者に，雪を身近に感じ取ってもらえるのではないだろうか．

（宮城学院女子大学　松村光太郎）

（2010 年 11 月 25 日受付）